

授業は商人に学べ

今夏の校長会の研修旅行は消去法の結果山梨と決まった。

旅行で最も頭を悩ますのは行った先の土産である。会員の中には地区の班全戸に買ってくることを習わしとしているところもあるようで、バスから降りる度に両手に袋をぶらさげてもどってくる姿が痛々しくもあり滑稽でもある。

NHKの大河ドラマは一度も見たことがないが、今年の上野は何ととっても「風林火山」である。甲府の街のアーケードはしゃれのつもりか風鈴の山である。しかし、上野は桃やぶどうや「この先しばらくの風林火山」だけではないのである。宝石の原石研磨ではすばらしい技術を伝え育てている地域であるということを経験ガイドの説明で初めて知った。

研修2日目早々、宝石庭園の見学というものが組まれていた。旅行の序盤ということもあり会員にはまだおみやげの購買意欲はそれほどない。手もみして迎えてくれた若い案内係は作った笑顔で最初にこう言った。「お客さんの目の保養になっていただければそれで結構です。」

紫水晶の原石や菊花石、桂化石といった高価な？巨石が庭園のあちこちにこれも見事な庭木とうまく調和している。順路の一路には枯山水の風情でメノウやヒスイといった中年おばさんのよだれの出そうな宝石がまるで公園の玉砂利のごとく敷き詰められている。

案内係は玉砂利の前で「ここへ案内すると急にお客さんが草むしりを始めるんです。」続けて「ここで転んだりするお客さんもいるんです。」校長会のおじさん面々の大きな笑いをとった若い案内人はこれで授業の導入部分を見事にクリアしたのである。しかし、授業の展開、課題の提示はこれからである。

順路も終わる頃、出口近くに身の丈ほどの石柱が数本立っている。磨き上げた光沢のある巨大な男性シンボルである。言わずもがな校長会の中にも何を願ってか知らぬがなで回す者がいる。ここでも案内人は指導案どおり「お客さん、あんまりさわると自分が空しくなりますヨ。」

さて、案内人が本時の課題提示に入る前の大事な準備発問である。

「水晶ネックレスとガラス玉ネックレスの見分け方をお教えしましょう。」

ここで確認しておくが、この時点で校長会の誰一人として女房に水晶のネックレスを買って帰ろうなどという無用な考えをもつ御仁はまだいないのである。

案内人、素人目では全く区別のつかない2つのネックレスを黒地のケースから取り出して白い紙の上に置く。するとその色のちがいははっきりと分かるのである。白く透き通っているのが本物の水晶で、くすんだ色が偽物のガラス製品だというのである。しかし、「偽物しか置いてねえ店だったらやっぱり分からねえなあ」と思うのはひねくれ者のオレだけか。

さて、いよいよ本時の課題提示である。宝石商へと変身した案内人がおもむろにケースから米粒が3つ連なったような水晶のY字ネックレスを取り出して「みなさん、このネックレスどこかで見覚えありませんか。」

おじさんたちには装飾品を付けている生身に関心があるのであってネックレスに見覚えなどあるわけがない。答えを待たずに「あの荒川静香さんがつけていたものと同じものです。」

おじさんたちに動揺が走った。テレビでしか見たことはないのだが、あの淡いブルーのコ

スチュームをまとっての反り返りバウアーはいまだにおじさんたちの脳裏に鮮明に刻まれている。

あのシズカちゃんのネックレスが今日の前にあるのである。

しかし、それでもまだ校長会の購買意欲に火はついていない。なぜなら「世界の荒川静香」が身につけるような高価なネックレスをいくら老後の面倒を看てもらおう負い目があったとしても前かがみしかできない古女房に買って帰る意欲も気力もない。

さあて、次の見学地へ移動しようか…と思ったその時、「お値段は決して高いものではありません。1万5千7百50円です。が、みなさん本日一番のおお客様ですから端数は切りましょう。」

勇気のある校長先生がつっこんだ。「端数っちゅうのは5千円から下やな！」

しかし、これが思うつぼだった。案内人、にんまり笑って「困りましたねえ…。…でもわかりました。お客さんがそうおっしゃるのでしたら切りましょう。1万円ちょうどで結構です！」

この若造案内人に客とのかけひきで売値を3分の2以下に仕切る権限があるとはどうしても思えない。いや、誰にどんな権限があろうとなかろうとこの際問題ではない。

一人の校長先生が「おれひとつもらおうわ」と言った。その瞬間、案内人は「勝った」。

あとは何の発問も必要なかった。バスにもどる校長先生方の半数近くが荒川静香の茶色の宝石ケースを手にしていった。

女性店員全員がバスまで来て深々と礼をし、両手までふって見送ってくれた。

ともあれ、若い案内人は指導案どおりの仕事をし、見事に「勝った」。しかし、校長会のおじさんたちも「買った」のである。つまり、両者が「かった」のであり「負けた」者はいないのである。ここが最も大切なところである。

宝石庭園はその日はもう店を閉めてもいいほどの売り上げを得たであろうし、おじさんたちにしてもたった1万円で普段はまず見ることができないやさしい笑顔と数時間の待遇を得られるとすればそれはそれでもうけ物である。

私はつねづね「授業は人を変えること」と思っている。子どもの中には初めから学習意欲満々の者もいるかも知れない。しかし、教室の何人かはできれば窓の外の世界に身を移したいと願っているにちがいない。そこで教師が学習意欲のない子を子自身のせいにして嘆いていても何の問題解決にもならないのである。

宝石庭園の入口では校長会のメンバーは全員学習意欲皆無の生徒であった事実を重ねてみよう。若造案内人に授業者の指導力を重ねてみよう。何か見えてこないだろうか。

そうは言っても、この案内人として年中、我々のような校長会にめぐり会っているわけでもなかろう。「ここでよく転ぶんです」と言えば、「俺はそんな年ではない」と真剣に怒る者がいるかも知れないし、自分は安藤美姫の熱烈ファンで荒川の身につけるものはすべてきらいだという者がいてもしかたがない。これは相手が悪かったと思ってこちらが笑うしかない。

ただ、今回の旅行でこの若い案内人から教師が学ぶ何かがあるような気がしてならない。